

漂流記『うばらがはな』翻刻と解題 (4)

崎 村 弘 文

カッヤンより呂宋のマニラーンに到るの圖」(1オ―2オ)

呂宋國地圖波廉帝應の圖を摸す」(2ウ―3オ)

呂宋瑪瑙郎港之圖」(3ウ―4オ)

澳門の圖」(4オ―5オ)

カガヤンよりマニラーンに至る海上島嶼の圖ハ儀へ衛か製る／ものなりその餘なるハハレンティンより寫し出せるなり／澳門の圖のごときハ八丈人のいふ所と少し異なる事／あれどしばらくこれを掲げ置て後の考をまつのみ」(5ウ)

呂宋日記

四月五日空晴る今日は風少も吹かず其上海深からねバ帆をまき走るべうも／なし故ニ手馬をおろしこれに碇をのせ二丁斗先へのせ行て碇を沈め／そが綱をたくりつ、船をよせ又手馬に碇引上ケのせ行べき先へ持行き／沈めて是をたぐりよするかくするをくりはえといふ也しかくりはえて／一里斗ンも船寄ければ大なる川口あり幅ハ三町もありぬべし多くの大船／爰にか、り並ふ此川の落口を浚^{サラ}らへゐたる調度こそ見も及び聞も／習ハざるものなりける鉄の柱を四本立て二間四方高サ五間斗りに／作り四方上下共に鉄の貫をしげく入れ屋根は厚き板もて掩ひ鉄」(6オ)の太き横木をわたし是に鉄の車四五ツくミ合せ置き傍に同しく／鉄の廣き樋の形したるを設け又棚

を作りて人の休らひ居る所とす水の／中ニハいかに作りなしけんしらず扱かの太なる車を夷二人して踏ミ廻ハせば／数の車打めぐりて自ら水底の土を堀り興し土砂は車につれてかの／樋のさましたる中にそ、ぎ入るればそれより流れ落る所に小舟を／よせて舟中に土砂をうけ舟一ツ滿れば外の小舟とかはりていづ地へか／持行て土を上る也車踏む夷裸になり歌唄ひつゝくるしき体ニも見えず／かく土を浚へるにつれて此家のごときがおのれといさりゆくさま誠に／ふしぎの器なり我國にも是を作り出たらばすぐれて人の力を省ぬ／べきもの也この傍をくりはえて川口に入り猶二十町餘りもす、ミ行て」(6ウ)船をと、めぬ彼小舟に乗りし女商來りてさま／＼の物を出しす、めけるに／長十郎目かね一ツ銀錢出して買取りぬおのれ心中に此もの共銀錢持／つべきやうなしこれハカッヤンにて女などに

近つき貰ひ請しなるべし／悪しき事をぞしたれと思へど今さらかひなし此夜は川中に止る○／六日空晴陸より下役シタツツカサのものど覚しきが吾人小舟にのり来りて此船に／のるこれハ守のためなりと覚えし昼比六十斗の夷一人小舟マにて来り／おのれに向ひ腹立し面地にてマニールンのパールの書たる物をカツボンマにてハ唾をはきかけ足にて踏ミにじるとのさまをくり返し／示しけるおのれさとりえさりがやう／くに思ひ出したるハ長崎／にてふミ絵とて彼キリスの形鑄たる鏡をふましむるよしかねて聞しが（7オ）その事なめりこはあからさまにいはゞ為あしかるべしときつと考／へわざと偽てニツボンマにてハマニールンのパールの書しものをバ／捧げ尊むと額へ手を挙てミすれば此人えうそ聞入るべきしきりに／踏ミにじるまねしたるをしかあらじと手をふりナウ／とてあなかちに／やまさればこの人やがて舟をこぎ返しぬ今日も船上アカりせよとの沙汰／なればむなく船にやどる○七日空晴屋根ある舟を三人してこぎ／来りその中より白き衣の上に黒き縹子の袖紐て胸に鈕釦かけし／衣着下は白キあやある股引のゆるきをハきかしらマハ頂マに三寸丸斗／に髪を残してその餘ハ剃り髪毛をくり組にし腰のあたり下けたる人は支那の人にてやがて唐山の人なり／この人の名ハ趙信といふよし後にしれり一人此船に移り我等を見て陸ウカへ上る（7ウ）べくはた行李も皆搬カび出すべきよしをしめすさらバ我行李をいつれへ／積んとハかるに折ふし小く細長きはしけ舟四五艘こぎ来りてこれへ／積なんとす我打見るに餘りに小く心もとなければゴロヂアンにたのミ／手馬に積バヤといふにキサンとてカッヤンより此船にたより乗りし／夷さへぎりて此小舟に荷を積ミ入れ三人も打のせ彼らか荷物は餘の／小舟につミこぎ出しけるが小舟に多くつミたれば舟重ワモくす、みかねしを／いそぎやらんとするなればあやまつ

て舟かへり人も荷も水に落ちぬ長十郎／遊を心えねば兩人して助け餘の舟に引あげおのれと助次郎もつゞきて／上り水に浮びたる行李を引き上る夷共皆ゞ力をそへ拾ひたれど十に／三ツハ流れ失せにきかくて岸に舟よせぬれたる荷を陸ウカに並らべ水をたらし（8オ）我等も衣をぬぎ絞りたるのミにて又ぬれ衣を打着たるかくて重五郎／初め十人のものとも出来り此等を先に立て運びゆく我等ハ彼チ、ナ人／の後につきて行けは物見の人大勢立し中を見るかげもなくぬれそばち／たるさまにて大路をたどり行く此所のさま左右の家瓦葺にて棟高く／二階或ハ三階をかまへくらのことく白く塗りなしたる所せきなくひし／くと建つらね二階に思ひ／くに飾りある窓を数多開き硝子張たる障子をたて／下家ハ土間或ハ石を敷それにくさ／の商ひ物を臺の上に並べ傍に／こしかけを多く置き人あまたこしかけをるワジュエーよりは人家大きく／凡てミヤひを盡し眼バゆき斗りその中に門戸をかまへしもありさて／三町餘り行ば七十間四方斗の二階づくりにしたる長屋かまへのやしきあり（8ウ）門にハ鉄の筋かねをひまなく打たる前に釘つきたる鉄炮持し襟赤／き衣に胴乱帯たる夷三人守り居たり此門を入れハくらく多く立並らび／大廈にかまへし家三ツあり四方ハ長屋にて人おびた、しう住なめり中なる／家の前にぬれたる荷をつミをくその家の内十人のもの共がありつる処に／つれ行ぬまづ茶をのミ爰ニおちるて四方を見るに土間の上に新に床を／かきて二間フタマとなしそこに我等を置しなりしハらくありて此の家の主と／ミへて年の頃三十あまりなる柔和に見えし人二階より下り来り對面し／何かいひつ、書付たる小紙を出さる呂宋商館主大清福建金恒と書たり／重五郎傍より此人こ、の主にて我等を厚く恵ミ給ふ人としらせければ頭を／下けよきにはからハせ給へと申

述る此屋敷の門の傍に大なる役所ありこれらハ(9オ)品よき人とおぼしが一人住ミその下官シタツカサも多くあり此の人の名ハヘイドロムスと／かいひ支那人ハ大官人といふすべて表の長屋ハミなこ、の土夷住居し跡／三ツの長屋にハ支那人住めり入口毎に赤き紙に姓名を書て帖(マ)りつけ又ハ／海門福聚或ハ百貨輻湊まれに觀世音菩薩など記たるをもはれり今我等が／居し金恒の家の次なる大家は金光といふ人住ミその次なるハ金稻とていづ／れも金氏の人にて福建の大富商なるが交易のためにこ、に来れるなりと／なん扱我等ハ皆金恒の許にあれど月毎(ヒゴト)の食事は此三人かはる／／あづかり／聞る、よし也一日三(マ)だひの食に四菜のそへものありあつきもてなしにて／カッヤンにありしとはかくかへの違ひなりか、る処に大官人の許より土夷／二人鞭持たるが来りて持渡りし荷物を改めんといふおのれ心え船子等に(9ウ)沙汰してそれ／／切り開き見せけれハ此人羽根の筆もて一書記したり／又夷四五人来り支那人も打交りて是を見る其中に先に舟に来りし夷一人／跡より越したる頭だちし人とさ、やき我／／をそと指さしモーロス／／と／いひけれバ頭たちたる人目を見出しナウ／／とて手をふりたり我何事にも心を／配り居しが此やうを見て大に心おちゐたり是ハ我等を私に数すべしやと尋ね／けるを頭だちし人手を打ふりあるべうもなしと止めけるなり事済て人々帰り／去れバ又繩もてゆひく、り土間の内に積置きぬれたるハ取出して物にかけ／置ぬ是より十三人一ツに圓居して久々相見ざりし情をのべかしこハいかに／ありしぞこ、はかうこそあれなど互に語りかハし誠や親子兄弟に逢たりし／心地して悦ぶ事限なし重五郎いふ去りし正月廿九日ワジュユにてわぬし(10オ)等ニわかれ船にのりてよりかしこ爰に船が、りして二月三日といふに海にハ／出

たり風並よくて同し十日に此処に入りたれどその儘舟に居てやう／／十三日に陸に上りこ、に来りたりその間船の中にて食事など八十人して／自らかしきたれど何一ツもあらざれば壺の中に手さし入れ撮ミ出しくひぬ／爰に来りし後長助肥前瘡なやミ出しこうじたれど此程ハ大におこたり／快くなりぬといふ助次郎が一人アフテンに残されし事なんと申出し夜半迄／語り盡さで寝ぬ○八日空晴朝金光金稻こ、に入来りおのれを／呼びければ二階に行て對面す金光は四十に近く金稻も五十あまりの人／なり三人腰かけたる傍進ミ出て我等大勢厚き恵ミを給ハリかたしけなく／こそ猶此上にもよきにはからひえさせ給へと申す扱この三人に具せられ(10ウ)我と長十郎助次郎共二門の脇なる大官人の許に至り扣へ居るに三人ハ二階へ／上りしバしありて金恒出来り三人を具して二階へ上る廣くかまへし処に／上の方にベイドロムス腰かけにあり六十餘り白髪なる人にて此もサンカン／なるへく覚ゆ左右には大勢立ならびこなたに三金も立たり三人出て／額づきければ金恒立べしと教ゆベイドロムス仕形して日ならずカツポン／に送りやるよしをいはれつればともかうも為よきやうにねぎ奉るとて／退きぬ大官人もやがて車にのりて出られたるは王の所に朝するなる／べし車ハ輪を左右と前と三ツつけその上に屋根を作り後ハ革にて張り／中に腰かけ壺ツを置それにか、り轅の内馬二疋つなぎて牽せ一疋には／御者ウマツカヒ打乗り鞭を執りて馬をつかふ従者三人をつれたり車の上二人乗り／(11オ)海島逸誌云、四輪者駕両馬、兩輪者駕一馬、四輪者前輪小而後輪大用木／為之、外、數百金鑲以鐵、或如小亭、大者可坐三四人、小者可坐一二人、雕花彩繪、每輪、王、坐鑲金者、有官職及甲必丹、皆坐彩繪者、平人坐漆顏者、其座褥、この所柱は石を悉碎彼為之、華廉奢僭也、あり大抵これらにひとしかるへし

磨き建て壁は白くぬり天井も薄黄にぬりたりすべて／美敷こと詞に

のべがたし庭に長サ二間斗十貫目程の大筒五六挺を雨／ざらしにならべをくその外局／隔ありて人多きさまなり此を出て／三金に申ハ潮ウシホにひたりし荷を塩ぬきせバヤと申けれバその事ゆるされて／皆々打寄り湯をたぎらかしそ、ぎかけて乾を熱トコロき土なれば／かはく事いと早しされど今日一日にハ干あへすゆふ方金光金稻の許に／行き十人の者ともとくより厚き恩を蒙るさへあるに又打そへて煩をかけ／奉るかたじけなきをのべれば金稻いふは我福建へは琉球の船年毎に来れる」(11ウ) からそれにとづけて日本へ送らんハ易かるべしなと申さる又金稻小キ／銅錢百三十その外烟草取出ひて三金ものより贈とてあたへらる此錢／を支那の下つ役にたのミ取替けれバ錢一ツか清の錢十文にあたり／持返り皆々へとらせけり○九日空晴已の刻斗表に人多くさわく出て／ミるにカッヤンより同船して来りしキサン并にはしけ舟こぎたるをのこ二人／足架にか、り大官人の許につれ来り糺し尋らる、さまなり傍に四十あまり／のうつくしき女一人立そふしバラく過て出行たるが牢ヒヤに入られしとなり／後に聞バ彼キサンさへぎりて小舟に荷多くつませし故に舟かへりたるを／彼女聞出し他の國人をあしざまニせし科を大官人へ聞え上けかく召捕へ／糺明に及ぶ又餘のはしけ舟の舟子等過ちせしのミならず運ひ賃を」(12オ) 我／か方へ取に越んとせしをかの女かたくと、めて夫ハ大官人より給はらばやと／いひ聞えし故にやがて大官人より給ハリしとなん彼女ハ常に人の悪しきを／こらし善をあらハしおのこにまさりし聞えある女なりしと金恒か焚炊者／なる魯璞といふが語りきこの魯璞ハ前の年長崎へ一度至りし人にて長崎／丸山女郎よかバ鍛次屋町多葉粉やなど申て片言交りにはなし出来る人也／かく心解けかたらひけれバ我等も水くミ薪わる事より萬づかれ

かする／程の業をたすけやりぬ又ギストンといふ夷こ、に入来りし時よく介錯し／えさせしが日ごとに来りけり此人ハ表の家に住居する人なり／○十日雨ふるさきに舟に迎られし人をり／爰に来るこれを魯璞／に尋ねしに名ハ趙信とてこ、に久しくあり福建の人なりといふ扱魯璞などの」(12ウ) 居所に行て見るにこ、の土間つきツキの奥に手／二床をかき棕櫚の席を／敷たり上に又蒲團をしき木綿のたれきぬをかけその傍の土間に／こしかけあり少しよき人は二階ニ住居するもありて此家の中に大抵四十人斗も／あり金光金稻の家も同く大勢居たり又長屋に住める支那人の中に／豆腐つくり又魚野菜商ふもあり又鉛細工縫ものするもありて一かた／ならずさながら市にあるがことし○十一日くもる日ごとに女商人さま／の物うりに来る菓子ハ筐カマに入れかしらにかづきもてくるそが中にけふハ／珍らしき菓コの子を見たり長サ三寸廻り五寸程かしら末細く惣体鱗たち／て蘇鉄の幹ミキのごとく末に葉の如きが附たり皮を去りくらへバ味甘くて／たぐひなし中に小き核あり名を聞しかどわすれたりその外マンガを多く」(13オ) 持て来る昼過る頃いつ方よりか魚翅イリコ海參蘇枋科藤などおびた、／しう運ひ来りくらに入れ又これより茶砂糖木綿類を多く持出すこれは／をとつ日三金打つれ出行しが是ら交易し来るなるべし日くれて土夷大勢／来り支那人打交り骨牌カルタを打ち 賭カケモノをあらそふ此中にクロス咬嚼人なり／手拭コトを破り腫も人長崎につ二人も交り戯れ遊ふ○十二日空晴金恒の／下官田鱗といふ人魯璞と共に来り我に向ひ近き中ニ日本へ送り帰すべし／是ハ三家より各へ贈るなりとて銀錢王面し錢なり／三ツを渡しけりかたしけなく／うけ納め扱魯璞をたのミ錢にかへけるに式貫四百文ありけるを銘へ割遣／しけり近きにも我国へ帰ると聞て皆々よろこびあへり○十

三日空晴朝／大官人の許より使来り糸行李を持て来れといひこしぬされハ金恒にその」(13ウ) 由を申くらの内より出し船子に持せつ、金恒とおのれそひて大官人の所に／至りければ(ママ)ペイトロムス立出てこれを開かしめ秤大なる天秤なりにかけ見るに十一貫七百目あるよし金恒しらせたり扱此糸を買ひ納めばやとのぞミける／をいかせんと金恒にはかりけるに否といふべしと教えければ賣ぬよしを／示しける扱こ、を出て帰り心に思ふは此糸をバ金恒もほしきさま也／此ほど我等厚き恵に逢ひつるむくひに此を三ツに分ち三金へ送ら／まくだめたれど彼より返し越さゞりき○十四日空晴る昼過る金光／金稲こ、に來りおのれをも呼ければやがて参るに例のごとくこしかけ居ゑ／我へもこしかけす、めて夫による扱高き机にさま／の肴を取つらね／酒を互にくミかハすはなむけの心なるべし金恒いふハこ、にある胡新風と」(14オ) いふはいたく心あしきものなり明日ハ大官人よりパカタ百枚を胡新風／取傳て贈るべしその時彼が手を経ずして大官人より直に請取べしと教え／らるこは定てやうある事ならめと思ひ心得たるよし申たり猶くさ／の物語の後に金稲申ハ我福建伴ひ行き琉球の進貢船にのせて／日本に帰さん事心易きに此事大官人にはかりしかどうべなハざりしが／残り惜しといはれたりとかくする程に酒もあまたくミそへて三金も／心地よげにゑひ我もいたくゑひ出て此座にたまらずいとま申ており立て／そがま、に打卧しぬ○十五日空晴朝とく土夷二人來り金恒と申合我等を／呼ひ今日日本に送り返すべければとく船にのり行李をもつむべしと／いふ皆々悦びかたじけなきよしを申述さて荷物取出さんとする所へ」(14ウ) 趙新出來り皂隸に沙汰して運びやらむ又大官人の許ハ三金の人々／おのれを具して参るへしと申來るやかて此人々と打つれ門

脇の二階へ参り／ければ大官人上の方にありて其下重役十人下官大勢居並らび三金と／外ニ二人都合五人立たる次におのれ出ければ大官人何かいはれけるがさとら／れす金恒傍によりパカタ百枚を贈られぬれば新風より請取るべきと／傳へらるおのれ大官人に向ひパタカ多く給ハリかたじけなくこそあれあはれ／同しうハ此処にて直に給らバやと申けれどもかれにもさとり得ずして／チーナにてパタカなき時ハ食にも事欠くべければ贈りつかはすと仕方／なからニ申されける金光も右のバタカを新風よりうけとり是よりさきのつひえ／にあつべきといはれければせん方なさに大官人へ此程の札をのべかへり」(15オ) 申つ、額き扱下りおり新風にパタカを請納めばやとするにはや何地へか／行けんあらず金恒にすがりてかの人尋ね出し請取給ハれかしたのミ／ければ金光金稲もあやしとておのれと四人してかしこ爰尋ねありき／ける十人のものハとく舟にのりはてたれど我ハいまた新風に逢ず金恒／あまりに尋ねわび船場のこなたなる茶屋の如き所へ我を伴ひこ、に頼ミ／をきしまてとて出行けり此間いたくひまありければ此家の主と／見えたる人出來り二階へ伴ひ行くこ、には鳥あまた飼をきう(ママ)つしく五色／なる鳥もありあふむいんこなんどハ目馴しかどその餘ハ名もしらぬが多かり／白あふむの鳥の鳴音人の詞をたくミにまねぶもあり手にすゑ肩にとま／らせなんどするになれあつ、飛去る氣色はなしか、る所に程經て金稲」(15ウ) 胡新風を伴ひてそ來りたるパタカを請取めんといへばチャンパンにて渡す／べしと云さらバとて主にいとまをつけ立出て新風がこ、の役人の乗り／たる舟に入るを見て後金稲に此程の情述べけふハ新風か事にてわづらひを／かけたるをわび猶金光金恒へよきに言傳給ハれといとまを告て立別れ十二人が／乗りし舟にぞの

りにけるけふは祝ひの事ありてや川のあなたの方にて／大筒をつゞけて打つ黒煙りおびた、しう立のぼり魂をひやす斗なり川口を／出はなれ一里程行て申の刻斗に本船にのり荷物をうつし入るかの新風／も土夷の役人と共に本船にのり移りければいそぎパタカを請納めんと／いふに新風銀錢五十枚取出し此内よりはしけ舟の料とて二枚を引きて／四十八枚をぞ渡したるハ八五郎してその数を数へ正させ扱申けるは大官人」(16オ) より百枚を給るよし金恒傳へられしにそれには数たらぬよしをいへば新風／かしらをふりて左にあらず金恒が通り傳へし也といふ今しもあらそふべきよし／もなくて請納めぬこは新風にたばかり半をばかれが私せし物なるべし／此人身をかくし金くかすめとらまくせしを三金に尋ね出され心ならず／半を渡せしなり此人心あしきよしハさきの日三金の人々ひそかにしらせら／れしにぞしられける扱官人等カピタンへ我等を渡し小舟にのりて艘き／帰りぬ此船はマニランの船にて名をバサンクローセイシといふ絵にかきし／阿蘭陀船のことく大サ二千石も積ぬへし柱三本立て帆は木綿にて六七斗あり帆繩は式百筋もか、れり船の外ハ銅もて張り舳には人丈より／大なる人手あけて指ざし居る形を彫り金箔をおしたりこれハサンクローシ」(16ウ) と云水神の像なるとよし大なる木の碇二ツいつれも鉄鑢りをつけて綱に／代ふ石火矢四挺つ、左右八挺そなへ傍に升籠に小石を夥しう一挺ことに／備へてく舳には楫を具へ傍にカピタンの局を二ツ作りそれよりつき／に局を／多く作れり凡船の上ハ板にて張りわたし表の舳船底に下る口あり梯を／經て下り見ればさま／の積荷水桶牛豚雞など飼く所もあり／常は此入口の蓋ひを閉ぢをくカピタン二人あり一人ハ五十あまりの人にて／ピセンテイウンシイ一人ハ三十四五に

ミえてもいふギヨクエと○ピロート一人／ゴロジアン一人グルメイ
テ一九人マルメイテ一八人又福建人二十人我／合て／五十四人乗
りたり 我等食事等ハ福建人とり 日くれ前に帆をまきて船出せしが／程
なく日暮ぬ手馬のかけにアンペラの席布き竹を引切たるを枕して」
(17オ) 打卧しぬ十人のものハ去ル二月十三日マニランに上りて
今日まで六十三日あり／我と長十郎助次郎はさる七日船上りして今
日までわづか九日になりぬ是／又いかなる所へ送りやらるにや覺
束なく思へど只我国に近づくを樂ミとして／日を送れり○十六日空
晴る夜の中に船はるかに走りつと覺て多の／鳥も後ろになしマ
ニランの山も遠くなりゆく船ハ亥子の針にて／走る船の上蔭なく
て熱サ堪へかたし湯茶なんどもなし夜に入て空／くもり雨ふるされ
ど立かくるべき所なし猶手馬のかけにか、まり居る／○十七日空晴
風すこし吹帆をまく事六十あまりグルメイテ一繩梯を／走り上り帆
をやり出しさま／に帆繩をあやつるありさまは人の業／とも覺え
ず此帆繩式百筋もあるがそれ／に名有りて静なる日には」(17ウ)
此をマルメイテ一に教ゆるなりゴロジアン三尺斗の鞭持て立つ、マ
ルメイ／テ一一人ツ、呼出しその繩の名を呼バマルメイテ一走り寄
てその繩をとる／又餘の繩の名を呼てはその繩をとりやる也数多く
数 だ び する 中 に ハ 繩 の 名 を 覚 え た が へ て あ ら ぬ 繩 を と ら ゆ れ
バかの鞭にて一ツ打つかく違え／たるが三度に過ればいたく打る、
なりこれにかハりてその呼繩をたがへ／ずいく度もとりすませバ甚
た美るさまなりかくして常に習はざれば／風波のをりゴロジアン
の指揮に應しがたきよしなりかくのごとくいく／たりともなくためし
試みる事日毎にいとまあればかくする也カピタン、ギヨク／エゆふ
方空を詠め居たりしがグルメイテ一を柱にのぼせ帆数を減し／左に

